

令和 7 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K18447

研究課題名（和文）アクティブな高齢者が活躍する東アジア諸国から日本社会のウェルビーイングを考える

研究課題名（英文）Comparative Study of the well-being of active agers in Japan and East Asia

研究代表者

櫻井 義秀（Sakurai, Yoshihide）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：50196135

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高齢者が健康で社会的に積極的な生活を幸福感をもって送ることについて、東アジアやオーストラリアの事例を紹介し、高齢者の宗教意識や嗜好・趣味、世代ごとの価値意識を調査して、現役を退いた人生の完成期であるサードエイジを生きるための条件を探る共同研究を行った。海外の事例調査と国内の社会意識調査を組み合わせた混合メソッドのアプローチを採用しており、社会学者、福祉研究者、医療従事者の共同研究になっており、2025年4月に櫻井義秀・清水香基編『東アジアのアクティブ・エイジング・サードエイジを生きる』北海道大学出版会、A5判全332頁、として刊行することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

私は、この数年間、ウェルビーイングの研究を行い、保健医療・社会福祉領域の専門家とともに臨床社会学的研究を進め（2019-2022年 基盤研究B「高齢多死社会日本におけるウェルビーイングとウェルディングの臨床社会学的研究」（課題番号19H01554））の助成を受けるかたわら、北海道大学の社会学研究室で学位を取得した留学生と共に本研究を遂行してきた。

アクティブ・エイジングのスキームは、高齢世代における 働く（社会的役割を持つ） 居る（第三の居場所の開発） 遊ぶ（趣味縁や宗教縁の活用）の三項関係をバランスよく保つことにある。日本以上に東アジアの諸国やオーストラリアに先行例があることを提示した。

研究成果の概要（英文）：This study examines how elderly people can lead healthy, socially active lives with a sense of happiness, introducing examples from East Asia and Australia. It investigates the religious awareness, preferences, hobbies, and value systems of different generations of elderly people, and conducts joint research to explore the conditions necessary for living a fulfilling life in the third age, the stage of life after retirement.

The study adopted a mixed-methods approach combining overseas case studies with domestic social awareness surveys. It was conducted as a collaborative research project involving sociologists, welfare researchers, and healthcare professionals. The findings were published in April 2025 as “Active Aging in East Asia: Living the Third Age,” edited by Yoshihide Sakurai and Koki Shimizu, by Hokkaido University Press, A5 format, 332 pages.

研究分野：ウェルビーイング研究

キーワード：ウェルビーイング ウェルディング 東アジア アクティブ・エイジング サードエイジャー

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は宗教とウェルビーイング研究の展開として、近年、尊厳死や終活に関心を寄せる高齢者、終末期におけるスピリチュアルケアや死後のグリーフと追悼儀礼を調査してきた。自律性を重視するあまり尊厳死を望み、自分らしさを葬儀・墓で表出しようとする自然葬・樹木葬を志向する現代人のメンタリティに孤立と不安、強い自律性規範を確認した。

定年退職後の社会的役割縮小期にいかにもポジティブに生き、社会作りにも参画するかはアクティブ・エイジングの課題とされる。しかし、実態は頼るものがない不安に苛まれる日本人のサードエイジ期を転換しなければ、日本人のウェルビーイングは超高齢化社会の進行と共にますます諸外国に比して低落の一途をたどるだけである。人生の最終段階へ至る前の十数年こそが、最終段階における医療のあり方、ウェルビーイングの質を決定するのである。

(2) 本研究では、サードエイジャー期の QOL の調査と指標化をめざした小田 (2004) の研究を基礎に、セカンド・ライフへの移行を就業機会と人的資源から考察した前田 (2006) からアクティブ・エイジングへの移行プロセスの発想を得た。そして、北海道大学で 30 年にわたり少子高齢化社会論に取り組んだ金子勇から、QOL に加えて QOS (地域社会のソーシャル・キャピタル指標と行政・医療・家族のケア環境) に立脚したアクティブ・エイジングを事例提示することで各人が想像力を働かせてセルフ・プランニングする施策提言を学んだ (2014)。こうした先行研究をふまえながら、ウェルビーイングの国際比較の視点を取り入れることでアクティブ・エイジングの新機軸を打ち出せると考えている。

文献 小田利勝 2004 『サクセスフル・エイジングの研究』学文社。前田信彦 2006 『アクティブ・エイジングの社会学 - 高齢者・仕事・ネットワーク』ミネルヴァ書房。金子勇 2014 『日本のアクティブ・エイジング - 少子化する高齢社会の新しい生き方』北海道大学出版会。

2. 研究の目的

日本は東アジアで最も充実した医療・社会保障を有するものの、OECD の Better Life Initiative やコロンビア大学他の幸福度調査によれば健康認知度と主観的幸福感が OECD の中では極めて低く、タイや台湾よりも低い (櫻井編 2018;2019)。超高齢化・長寿化社会のフロンティアでありながら、日本の高齢者は認知症を恐れ、迷惑をかけない死や葬儀を望むことが死生観の調査でも明らかにされている。また、コロナ禍において日本人の過度の自律性規範と孤立感 (人に迷惑をかけない - かけられたくない) および交流機会や行事の自粛が全世代の主観的幸福感を減退させている (櫻井 2020)。

現役を退き人生の完成期にある高齢者 (サードエイジャー) が、生き生きとアクティブに過ごせることは、超高齢化社会日本にとって極めて重要である。そのためのヒントを北欧の福祉先進国ではなく、宗教文化や社会構造が日本に近い東アジア諸国のサードエイジャーの在り方に学び、国民の主観的幸福感の向上に貢献することが本研究の目的である。



高齢化する地域社会において家庭医やケアマネージャー、病院が連携して地域包括ケアを実施しているが、公的制度だけで「拠り所」や「いのちの見守り」を用意するには財政的負担が大きすぎる。地域住民の主体性とポテンシャルを生かして居場所を作り、健康と幸福感を増し、社会保障の不足を補うやり方を日本は他の東アジア諸国から学べるのではないか。

東アジアのアクティブな高齢者を分析するには、働く (稼ぐというより必要とされることをなすこと)、居る (気心の知れた人と交歓する)、遊ぶ (日常生活を離れること) であり、宗教文化もその一つ)

のバランスに着目することが必要である。

<働く・居る>はウェルビーイング研究や老年学研究において健康とポジティブな感情、安心を与えるとされる。この二つに高齢者が日常を離れた空間で役割を担い、ソーシャル・キャピタルを活性化させ、充足感を味わう<遊ぶ>時空間を加えた要素の重要性を東アジアの宗教文化調査から明らかにする。

櫻井義秀 2020 『人生百年の生老病死 - これからの仏教、葬儀レス社会』興山舎、四六判全 309 頁。

3. 研究の方法

本研究では日本サードエイジャー世代を対象に意識調査を行い、QOLを構成する諸要

素を抽出すると共に、申請者に地域調査の経験と協力機関がある韓国・中国・台湾・香港・タイの五カ国でアクティブな高齢者の〈働く・居る・遊ぶ〉の諸側面を探索的に比較調査する。下記の表で調査地域ごとに研究分担者・協力者による調査項目を示してある。

	日本	韓国	中国	台湾	香港
	(北大) 櫻井義秀 研究統括 宗教とウェルビーイング 樋口麻里 医療社会学 清水香基 調査設計	(東海大) 李賢京 地域福祉と宗教施設 (ソウル大) Kim Hon-jung 感情社会学	(河北経貿大) 郭莉莉 社区と高齢者ケア (北大) 翁康健 民俗宗教と地域社会	(中央研究院) 齊偉先 宗教文化と地域 黃約伯 社会文化論	(北大) 伍嘉誠 社会福祉と宗教 (中文大学) Lin Nakano 東亜女性論
2021	1) 〈働く・居る・遊ぶ〉の調査方法に関して研究協力者と打合せ 2) ワークショップ(札幌がオンライン開催)により課題共有 3) セカンド・ライフの移行に関して労働力・社会保障・地域福祉の概略を文献調査				
2022	〈働く・居る・遊ぶ〉の諸側面を地域社会・文化・高齢者の生活から 各地で事例調査				
	1)退職後起業家、社会活動家の調査 2)サードエイジャーの全国調査票調査(ネット調査)	1)地域と敬老堂、老人福祉会館 2)自営業への転職事例調査	1) 社区福祉施設、広場利用調査 2)孫育て調査 3)祠堂と村落	1)民間信仰の護持団体 2)慈済基金会の義工(ボランティア)調査)	1)キリスト教NPOの福祉 2)社会運動と福祉
2022	1) 〈働く・居る・遊ぶ〉の調査結果取りまとめ、必要に応じて 補足調査実施 2) 海外の協力機関と共同で香港・韓国・日本社会学会(国際セッション)などでのパネル発表 3) 学術書『東アジアのアクティブ・エイジング - 超高齢化社会の世代間協働』の刊行準備・編集作業(北海道大学出版会からの刊行を計画)				

4. 研究成果

2025年4月に櫻井義秀・清水香基編『東アジアのアクティブ・エイジング - サードエイジを生きる』北海道大学出版会、A5判全332頁、として刊行することができたことが最大の成果物である。研究会の開催や学会発表などはここでは省略する。

本書の構成には、総論、第一部、第二部(調査票は巻末)、特論を配している。総論「サードエイジャーのウェルビーイング」では、編者の櫻井が日本の超高齢化の現状をまとめたうえで、サードエイジ期にある高年齢者が直面する生活課題や人生の課題について展望する。現役を退き人生の完成期にある高年齢者(サードエイジャー)が、生き生きとアクティブに過ごせることは、超高齢社会の日本にとって極めて重要である。そのためのヒントを北欧の福祉先進国ではなく、宗教文化や社会構造が日本に近い東アジア諸国のサードエイジャーの在り方に学ぶことで、国民の主観的幸福感の向上に貢献できる。

第一部は、この韓国・中国・香港に加えて、日本とオーストラリアの事例をさらに参照項として加える。一章では、三田絵里が日本の豪雪地帯である旭川市における除雪支援活動を通じた高齢者のウェルビーイングを紹介し、二章では金昌震が、急激に都市化が進んだ韓国大邱市において高年齢者が地域の高齢者福祉センターにおいて生涯学習活動に参加しながら社会関係資本の再獲得をめざす姿を活写する。三章は、郭莉莉が、中国の都市部における公園の見慣れた風景となっている広場ダンスを解説する。そして、ダンス・グループに新入りとして参与観察しながら、離郷して孫育てで子ども家族を支える高齢女性の姿や、広場ダンスを通じて生きがいや人間関係を構築する都市高齢者の像に迫る。四章では、伍嘉誠が中国の香港特別行政区における近年の社会運動参加者を事例に、民主化や市民活動のスペースを確保しようとする中高年世代の社会意識やウェルビーイングのあり方を展望する。五章において、モンゴル出身で日本において学位を取得し、オーストラリアの大学で働くダライヤン・ビャンバジャワが、「男の小屋」運動を通じた高年齢男性のウェルビーイングを紹介する。

東アジアのアクティブな高齢者を分析するには、働く(稼ぐというより必要とされることをなすこと)、居る(気心の知れた人と交歓する)、遊ぶ(日常生活を離れることであり、宗教文化もその一つ)のバランスに着目することが必要である。

定年退職後の社会的役割縮小期にいかにポジティブに生き、社会作りに参画するかはアクティブ・エイジングの最重要課題である。この世代のポテンシャルを生かさないほうはないし、生かさなければ労働力が不足する日本では働き手を見つけることができないだろう。老後の不安に苛まれがちな日本人のサードエイジ期を転換しなければ、日本人のウェルビーイングは超高齢化社会の進行と共にますます諸外国に比して低落の一途をたどるだけである。人生の最終段階へ至る前の十数年こそが、最終段階における医療のあり方、ウェルビーイングの質を決定する。

本書第二部では、二〇二一年に全国の六〇歳から七九歳までの男女を対象に実施した「セカンド・ライフに関する意識調査」を中心にまとめている。主な調査項目は、セカンド・ライフの実態。退職後のキャリアと地域活動・社会活動。健康意識や政治意識。趣味の有無とそれを通しての人間関係の構築。社会参加の機会と生活満足度や健康、精神的安定の関連。終活。葬儀・法要、墓、寺との関係の持ち方。宗教や仏教に期待することである。

第六章では、清水香基と櫻井義秀が調査概要を説明した後、主要な知見を要約的に記述する。第七章は、工藤遙が高年齢期におけるウェルビーイングのジェンダー差がなぜ生じてくるのかを考察し、第八章では、遠山景広が高年齢者は地方在住者か都市在住者かの違いで社会的ネットワークに差異があるのかという議論を展開する。第九章では、坂無淳がサードエイジ期と俸給生活者の定年をどう関連付けられるのか、文化やジェンダーの観点から考察する。そして、第一〇章では、高年齢者や高齢者のウェルビーイングを高めることに宗教文化がどう関わっているのかを分析する。

これらの調査結果から高齢期における「働く・居る・遊ぶ」を実現するために、日本社会においてどのような資源が利用可能であり、また期待されているのかといった提言を出そうと思う。そのうえで、特論として櫻井が、二〇二〇年から二二年にかけて日本人のみならず世界の多くの国々で人々の生活を一変させたコロナ禍とウェルビーイングの関係を論じる。

本書の第一部「東アジアのアクティブ・エイジング」と第二部「日本のサードエイジャーにおける生きがいと生活」は、いずれの章もオリジナルな書き下ろしの調査研究である。サードエイジ期・林住期にいる高年齢者やその後の世代に関わる医療者や社会福祉の担当者、家族社会学、地域福祉の研究者にとって有益な情報が含まれるものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 櫻井義秀	4. 巻 5
2. 論文標題 日本を『カルト天国』にしないために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央公論	6. 最初と最後の頁 132 - 139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 櫻井義秀	4. 巻 8
2. 論文標題 統一教会 - 宗教リテラシーと歴史認識の貧困がもたらしたもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 105 - 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 櫻井義秀	4. 巻 12
2. 論文標題 統一教会問題の解決とは何か - 『解散命令』請求の限界	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 81 - 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 翁康健・清水香基・伍嘉誠	4. 巻 12
2. 論文標題 中国少数民族と漢族の間における格差 CGSS2017 データを用いた社会移動と暮らし向きに関する分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 21世紀東アジア社会学	6. 最初と最後の頁 76-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20790/easoc.2023.12_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樋口麻里	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 何が精神障がい者に対する寛容な社会意識を高めるのか 国際比較研究からみる日本の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 自殺予防と危機介入	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 139
2. 論文標題 Schwartzの「価値観理論」の構築とその後の展開：「円環連続体モデル/ヒエラルヒカル構造モデル」に焦点を合わせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井義秀	4. 巻 11
2. 論文標題 日本の新型コロナウイルス感染症への対応と顕在化した社会問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 21世紀東アジア社会学	6. 最初と最後の頁 22 - 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 櫻井義秀, 清水香基
2. 発表標題 セカンドライフに関する意識調査 - 調査の視点と方法
3. 学会等名 北海道社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshihide Sakurai
2. 発表標題 Religions And Politics In Japan: After The Murder Of Former Prime Minister Shinzo Abe And The Unification Church 's Issue
3. 学会等名 International Society for the Sociology of Religion 37th Conference
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshihide Sakurai
2. 発表標題 New Developments in the Relationship between Politics and Religion in Japan
3. 学会等名 5th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ng, Ka Shing
2. 発表標題 Religion and Biopolitics in Hong Kong: Religious Responses to Government's Zero-Covid Measures
3. 学会等名 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Koki Shimizu, Kangjian Weng
2. 発表標題 Examining "Non-equivalence" in Measuring of Religiosity in East Asian Societies
3. 学会等名 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshihide Sakurai
2. 発表標題 The second suppression of Omoto-kyo; and its members' belief and experience in 1935-45' 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion
3. 学会等名 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 櫻井義秀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 339
3. 書名 統一教会 - 性・カネ・恨(ハン)から実像に迫る	

1. 著者名 櫻井義秀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 384
3. 書名 信仰か マインド・コントロールか - カルト論の構図	

1. 著者名 櫻井義秀・猪瀬優理編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 336
3. 書名 創価学会 - 政治宗教の成長と隘路	

1. 著者名 櫻井義秀・上田絵理・木村純一・佐藤直弘・柿崎真実子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 208
3. 書名 大学のハラスメント相談室 ハラスメントと向き合うすべての人へ	

1. 著者名 櫻井義秀・平藤喜久子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 現代社会を宗教文化で読み解く	

1. 著者名 櫻井義秀編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 320
3. 書名 ウェルビーイングの社会学	

1. 著者名 櫻井義秀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 339
3. 書名 統一教会 - 性・カネ・恨（ハン）から実像に迫る	

1. 著者名 櫻井義秀・平藤喜久子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 285
3. 書名 現代社会を宗教文化で読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	李 賢京 (Lee Hyongyon) (80584333)	東海大学・文学部・准教授 (32644)	
研究分担者	樋口 麻里 (Higuchi Mari) (80755851)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	伍 嘉誠 (Ngo Ka shin) (90808487)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	清水 香基 (Shimizu Koki) (20907563)	北海道大学・文学研究院・助教 (10101)	
研究分担者	工藤 遥 (Kudo Haruka) (20888036)	拓殖大学北海道短期大学・その他部局等・助教 (40123)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	遠山 景広 (Toyama Kagehiro) (60967983)	札幌大谷大学短期大学部・その他部局等・講師 (40107)	
研究分担者	金 昌震 (Kim Chan jin) (00849721)	札幌大学女子短期大学部・その他部局等・准教授 (40128)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関